慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「港區史」上・下巻(東京都港區役所編・發行)
Sub Title	
Author	會田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1960
Jtitle	史学 Vol.33, No.1 (1960. 12) ,p.115- 117
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19601200-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

する時、キリスト教思想の形成について次のように云えるのは當然である。「キリスト教が借り受けをしたのは身遠な異教的環境からではなく、考古學やフィロロジィの發見物と共にクムラン文書が示しているように、既に hellenize されたユダヤ教からである。」それ故、西暦元年に至るヘレニスティク時代のパレスチナ社會史の研究の重要性は極めて大きい。Hadas はキリスト教の傳統のうち、祈りや告白・天國思想等についても考察を加えている。

要するに、本書はヘレニスティク文化が西洋の傳統の母胎であることを組織的に明らかにし、その文化の偉大な生命力に對して西洋史の流れの中で正當な地位を確立させたものである。これによつて、ギリシァ・ローマ・中世と並べてヘレニスティク時代を過少評價する從來の修史に反省を起させ、オリエント世界を含む古代史のより綜合的理解を可能にさせるであろう。我々は機能的方法と歴史的方法とをかたよらずに用いることによつて、ヘレニスティク世界の社會や經濟現象の構造とその歴史的・空間的方向を解明し、文化との關連づけに努力すれば、本書では不充分なかかる文化運動の必然性までを理解しうるであろう。

著者は Columbia 大學教授であり、過去十年余りの間に古典に關する著書・英譯が多數ある。

（小川英雄）

「港區史」上・下卷（東京都港區役所編・發行）

このたび、昭和三十五年三月十五日、「港區史」上・下卷の刊行をみた。上卷千百三十六頁、下卷千六百五十八頁、二卷合わせて二千八百頁におよぶ大冊である。昭和三十二年二月同區の誕生十周年記念事業の一環として計畫され、同年六月編纂に着手して、滿三年の歳月を費し完成したもので、計畫の當初たまたま當局者から相談をうけた一人としてまことに同慶に堪えない。しかも、名義上は港區役所編とはなつているものの、實際にこれが編纂にたずさわつたのは、ほかならぬわが慶應義塾大學の教授松本芳夫氏ら義塾の人たちで、松本教授はみずから監修にあたられ、編纂主任にはこれまた義塾出身の武藏工業大學教授武田勝藏氏が任じ、その下にも二、三の塾員が關與したのであつた。

内容は上卷を四編にわかち、第一編序說、第二編街史、第三編原始時代、古代、中世、第四編近世として、江戸時代のおわりまでをあつかい、下卷に第五編近代、第六編現代の兩編をおさめている。近代というのは明治維新から太平洋戰爭の終結までで、その後昭和二十二年三月東京都内の芝、赤坂、麻布舊三區が合して出來た港區の、誕生から現在までを現代とするのである。したがつて、本區史の眼目とするところはいわばこの第六編にあるべきで、それに舊三區時代についてはそれぞれ「芝區誌」、「麻布區

史」、「赤坂區史」がすでに出版されてもいるので、外見上不均衡は多少あつても、こんどの區史が下卷により多くの頁數をさいたのは當然のことといえよう。もつとも、そうはいつても、舊區史はもとより本來別々に編纂されたものであつて、どうしても互いに統一を缺き、その時代全部をそれらにすつかり讓つてしまうわけにはもちろんいくまいし、また事實こんどの編纂では、その部分でも、それらの上に立ちながらさらに本格的な史料蒐集をすすめて、まつたく面目を一新した感がある。そればかりか、經費の關係上、町名沿革一覽約二百頁がやむを得ず上卷から削除されたともきく。決して上卷に力が惜しまれたわけでないことがうかがわれよう。

そして、第一編序說ではまず同區の位置、面積、地勢、地質、氣象等から地域のうつりかわり、區名の由來などをしるし、ついで第二編街史においては同區の市街としての發達の概要を先史時代から說き、かつ區內の各町の起源と變遷とを述べ、第三乃至六編に原始時代以降現代にいたる同區の歷史を各方面にわつて細敍し、そのためにとのえた史料は國會圖書館上野分室の「文政書上」、東京都都政史料館の「御府內沿革圖書」等の寫眞をはじめ、實に一萬三千枚を數える寫眞、および筆寫した史料、製本數にして約八十冊、あつめた參考圖書約五百三十冊に達したという。のみならず、もつぱら自然地理的敍述に終始する序說や、街史のようにどちらかといえば地誌的興味を中心とするものを除き、この書には全般に、江戸あるいは東京という都會のなかの一區劃における事象を、必ずしもその一區劃のこととしてだけに止めず、つとめて全體のなかにとらえようとしている樣子が隨處に見られる。このことは、このような區史のたぐいがとかく地誌的な關心にだけおわりがちな弊を、よく斥けたものといえよう。

そのほか、各卷頭にかかげられた今昔對照寫眞以下三千五百枚をこえる敎多の圖版類も非常に興味深く、卷末には索引が付されて、いたつて克明な本文の頭注とともに、この浩澣な書物の活用をたいへん便ならしめている。利用者の立場を重んじた親切な編集といわねばならない。このような區史というものは、單に一編の史書というだけでなく、同區になんらかのかかわりをもつ人々の關心にこたえる意義もおそらく多分に有することであろうし、すすんでは該區の行政上の參考に資する使命もおそらく少なくないに違いないと思われるからである。

ただ、なにぶんにも短期間のわりに厖大な編纂事業であつたから、なにかと困難の伴つたろうことは充分察しられるが、間々誤植の目につくものがあり、ややもすれば將來への訛傳の因をのこしそうな懸念が感じられるふしなきにしもあらずなのは遺憾である。とりわけ、上卷一二三頁に慶應義塾が芝新錢座から三田の島原藩中屋敷に轉じたことをしるしながら、すぐ前の頁にそれを下屋敷と誤つたり、二九三頁に三田演說館の都重寶指定を大正十年四月（實は大正四年東京府の史蹟に指定され、都重寶指定は昭和

三十五年三月のことである）としたり、下卷でも三一六、三一七頁に慶應義塾中等部を同商工學校および商業學校の後身のように混同したり、一一四六頁、昭和の創立であるべき慶應義塾女子高等學校、同中等部兩校を明治の創立と誤植したりしているごとき、些末といえば些末なことかも知れないが、義塾關係者からみればやはりいささか氣になるし、上卷一六一頁の「えて」にことさら「えて」とフリガナをつけたり、一九一頁の今井町附近の寫眞が本文と二、三頁ズレて入つていたりするのも、いかにも間の抜けた編集上の手違いといわれても仕方がなかろう。

また、ついでに強いていうならば、明治時代の來朝外人に關心をもつわたくし個人とすれば、上卷三四一頁青山靈園主要墓地の項に、輕井澤の開拓者アレキサンダー・C・ショウや、セメンエンの創始者ジュアン・B・シモンズのことの缺けているのは淋しく、これだけの本にその程度のことは避けがたいとは知りつつも、なお他の個所にもそこここにきつと同樣の感をいだかれる讀者がいるのではあるまいかと、ふと考えたりする。

しかし、なんにしても萬全は期し難く、とにかく諸種の制約のなかで、短期間によくもこれだけの大著をまとめあげたものと、執筆者各位の努力にはひたすら敬服せずにいられない。かえりみれば、昭和三十二年という年は東京都内舊各區が行政上の都合による統合を施されてちようど十年になり、ために、ひとり港區といわず、そのとき統合された新らしい區ではみな思い思いに記念事業を企畫して、そのなかにほとんどの區がことごとく區史編纂のことを加え、しかもそれらの各區がまたきそつて强力な編纂スタツフをそろえて、期せずしてあたかも競爭のかたちとなつた。かくて、港區は地元の關係もあり、これをとくに慶應義塾に依賴してきたわけで、そういう意味からも、ここにこの完成をもたらしたことは實にめでたくも喜ばしい限りである。（會田倉吉）

執筆者紹介

清水潤三	本塾文學部助教授
太田次男	本塾普通部教諭
可兒弘明	本塾文學部考古學民族學研究室
笹津備洋	同　右
武田勝藏	本塾々史編纂所囑託所員（武藏工業大學教授）
會田倉吉	本塾々史編纂所主事
小川英雄	本塾大學院學生